
とある夢の物語

つづみー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある夢の物語

【Nコード】

N9375M

【作者名】

つぶみー

【あらすじ】

筆者が実際に見た夢をあれこれ改造（妄想）して小説にしてみました。

オリキャラ注意。一応日和キャラ出ます。

雪山で起こる殺人事件。

物騒な事件が囁かれる中で修学旅行にやってきた中学生、赤部達樹。
初日の夜、上代雪菜と共に、クラスメイトの河合曾良と担任の松尾
芭蕉の

とある秘密を知ってしまう・・・

その秘密がキツカケで『物の怪』と戦うことになってしまった達樹は
元の「平凡な生活」を取り戻すことが出来るのか・・・？

白銀の向こう側で

『ニュースです。昨夜未明、雪山の中で体刃物で貫通され、燃やされていた遺体が見つかりました。』

先週起きた事件と同じ反抗から、同一犯として、警察では捜査を・

・

・・・近頃、雪山でのこういう事件が増えていた。

身体のほぼ真ん中を刃物で突き刺し、貫通させ、

それから、身元を分らなくするためだろうか、燃やしてしまう。

見るからに残酷な事件。

発見されるのは決まって雪山。

誰もが絶対関わりたくないと思っている事件。

・・・そんな事件に、僕、赤部達樹は巻き込まれた。

窓の外。

ふんわりと空中飛行を楽しんでいる雪の雫。

都会を離れるにつれ、段々それは数を増していく。

修学旅行、スキー教室の行きのバスの中。

車内では、はしゃいでいるのもいれば、酔っているのもいるし、

俺みたいに静かに窓の外を眺めたり本を読んだりしている者もいた。
俺の隣に座っている河合曾良も、静かに本を読んでいた。

河合は、学年で1、2を争う美少年だ。クールな雰囲気、綺麗な黒髪。

女子は勿論、男子にも結構人気のあるいうから、僕とはちょっと違う。

俺は普通で平凡。河合みたいにカッコよくないし、逆に不細工でもない。

だからクラスにも普通に溶け込んでるし、普通にやっていける。
俺にとって普通ってモノはそこらじゅうに転がっており、手にとっ
て感じられた。

「おい、達樹。」

「ん？何？」

後ろから声をかけられた。

友人が窓の外を指差して隣のクラスのバスを指差した。

「あれ、見てみるよ。前から5列目の。」

「え……？」

友人に言われたとおり、隣のバスの前から5列目の窓際を見ている。降り続く雪のカーテン越しに、長髪の綺麗な少女が見えた。

「あれ、上代だぜ。転校生の。」

「上代……」

上代雪菜。3学期の初めに転校してきた少女だ。

綺麗で、河合みたいに男女がまわす人気。

しかしどこか不思議な感じのする少女。

ぼーっとしながら上代を眺めていると、ちらりとこちらを見て、微笑んだ。

一瞬だけだったが、何故かどきりと冷や汗が流れる。

そしてぱっと前を向いた。

「どうしたんですか？」

「え？」

気がつくと、隣にいた河合が、少し不思議そうな顔で僕の顔を覗き込んでいた。

どうやら僕は赤面してたらしい。何故だか分らないけど。

恋心？ まっさかあ。

いつもと変わらない気持ちの中、雪だけが、僕の心を溶かしていた。

やがて、俺らを乗せたバスは目的地へと到着した。

暖かい宿舎に入り、滑り初めの明日に備える。

俺はクジで、運がいいのか悪いのか。バス同様、河合と同じ部屋になった。

……決まったときは、色んなクラスメイトから妬みの視線浴びたっけ……

一応荷物を纏めて夕食までは自由時間。

部屋の中には、俺を含むルームメイトの皆、計6人がいる。

することもないので個人で好きなことをしてた。

数分後。ある空気ブレイカーによりその雰囲気がぶっ壊れた。

「ちーっすバカ男子！遊びに来たぞー！」

同じクラスのきわめて活発な女子が堂々とドアを開け放って入ってきた。

一瞬でルームメイト全員がそれを見る。俺なんか、そいつを思いっきり睨んでやった。

「空気壊すなA子。」

「ちよ、そんな脇役みたいに扱うなっ！！」

顔見知りだった俺は平然とその言葉を言っただけ。

こいつも多分、河合目的で来たのだろう。

ちらりとそのご本人を見ると、怪訝そうな顔してあいつを見てた。

「ちよっとお！何よそれー！今日はみんなで来たんだから！」

「皆？」

「そうよ。ほら、皆入って入って！」

その一言で、入ってくる女子達。

見たところざっと4人辺りか。

・・・その中に、さっきバスから見た『あの少女』も混じっていた。

「あ・・・っ」

思わず声が出てしまった。

長い黒髪や瞳は闇のように真っ暗で。

肌だけが、雪のように真っ白だった。

「雪菜ー。ホラ、この人が河合君だよ！」

A子に連れられ、上代は俺の目の前を通り去っていく。

そして後ろで本を読んでいる河合に眼を合わせた。

「上代雪菜です。はじめまして。河合君。」

「・・・河合曾良です。はじめまして。」

予想通りなんだか、二人の凄い静かな自己紹介にA子も俺も硬直。

あまりにも普通すぎてなんだか言っ事がなさすぎる。

二人の時間が止まっている最中、上代が声を上げた。

「河合君、何の本を読んでいるんですか？」

「……『奥の細道』ですよ。」

「河合君って、意外と文系なんですね。」

「よく言われます。」

『奥の細道』。

……河合らしいや。

茶色い表紙のその本はそれなりの厚さを持っており、

普通の単行本でも読み終えるのに2ヶ月もかかる俺だったら、読めるのに4ヶ月は軽く掛かりそうだ。

「河合君って、松尾芭蕉、好きなの？」

「はい。どつかのクソジジイと違って、威厳があると思います。」

「……それって」

A子が言いかけたその時、ノックが聞こえたかとおもつと、またドアが開けられた。

再び全員の顔がドアへと向けられる。

ドアから覗いたその顔を見た瞬間、河合は顔を曇らせ、舌打ちした。

「松尾先生!!」

「そ、曾良君……マーマー君返してよ……松尾今夜寝れないよ……」

顔を覗かせたのは、茶髪で中年の国語教師である、松尾芭蕉先生。俺らの担任だ。

偉人と同じ名前ということは、学校の中でも有名な。

そのせいか、先生は文芸部の顧問をしているのだが、俳句の展覧会

に出品することも少くないという。

河合は顔を曇らせたままで、先生から視線を本へと落した。

無視されて涙目になる先生を横目で見て、A子は言った。

「河合君……相変わらずだけど、返してあげたら？また没収したんですよ？」

「ええ。目障りだったので。」

「ひドウい！！松尾今夜寝れないよ！マーフィーくん！！」
「……河合の松尾先生いじりは、松尾先生の名前と同じくらい有名だ。」

クールな顔して松尾先生に対してだけは容赦はない。

今日もまた先生愛用のぬいぐるみを拉致られてるらしい。

「……何があつたんですか？」

何も知らない上代が声を上げた。

A子は「あ」と、忘れていたような顔をしている。

「何も知らないほうがいいと思う。上代。」

俺はさりげなく上代に助言しておいた。

頭に疑問符が浮かび上がっている上代は、世間知らずのお嬢様みたいだった。

「先生」

ふと上代が立ち上がり、先生の所へと歩いていった。

につこりと微笑んで、ポケットから何かを取り出したかと思うと、先生に差し出した。

「代わりにならないと思いますが、私が作った人形でよかったら、差し上げます。」

「へ？……いいの？」

先生は眼をぱちくりしていた。

遠目からみたその布の人形は、白くて、海に浮かぶクリオネみたい

な天使の人形。

見るからに女の子らしくって可愛い人形だった。

「皆にあげようと、たくさん持ってきたので。どうぞ。」

「……本当？ありがとう。」

先生は申し訳なさそうに笑うと、その天使の人形を受け取った。

上代は先生に対して明るい笑顔を向けた。

「……同じような雰囲気でも、河合とは天と地程の差だ。」

「……先生が去った後、河合は自分の荷物をあさり、

こげ茶色のぐつたりとしたぬいぐるみを取り出した。これが先生の

「マーフィー君」である。

今日は無傷らしくて、その布地から白い綿が食み出していると言う事はなかった。かなりの奇跡だ。

「あ、やっぱ隠してたんじゃないか。河合。素直じゃねーよな、お前
って」

言った瞬間、俺はしまったと思った。ついっかかり本音を吐いてしまった。

河合は怒るとかなり怖い。っていうかどす黒い。恐ろしい。

恐る恐る河合の顔を見てみると、案の定少し黒い顔をして、俺を睨んでいた。その視線だけで寒気がする。

でも、不思議なことに何も言ってこない。

何でだ？と思っただが、それは上代のおかげだ。と一瞬で把握した。

俺から眼を逸らし、マーフィー君を上代に手渡す河合は、顔に何処か安らかな気持ちが見え隠れしていた。

俺はこの天使に救われた。本当に。

「……つと、そろそろ時間だね。バイバイ！」

時計を見て、女子が立ち去っていく。

夕食10分前。5分前行動という面倒くさい行動のために帰るらし

い。女子は真面目だなあ。

上代は俺と河合にっこりと微笑んで、俺らの部屋を去った。

ボタンと閉ざされたドア。

数分の静寂が流れた。

「さて」

河合はボタンと本を閉じる。一瞬にして背筋が凍った。

助けを求め辺りを見回すと他のルームメイトは見てみぬふりしてた。
見捨てるなあ！！

もうダメだ・・・そう思ったとき。

「僕も早めに食堂に行きますか・・・」

河合は不機嫌そうにドアの向こうに消えていった。

・・・天使は俺を完全に護ってくれた。

白銀の向こう側で（後書き）

< 次回予告 >

「上代！！早く！追いかけて！」

「一体どうなってしまうの・・・！？」

「見てはいけないことだったんですよ」

「どうして何だよ！！先生っ！！」

「曾良君を・・・っ・・・離せえッ！！！」

Next・・・第二話「凍った炎」
お楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9375m/>

とある夢の物語

2010年10月8日23時29分発行